

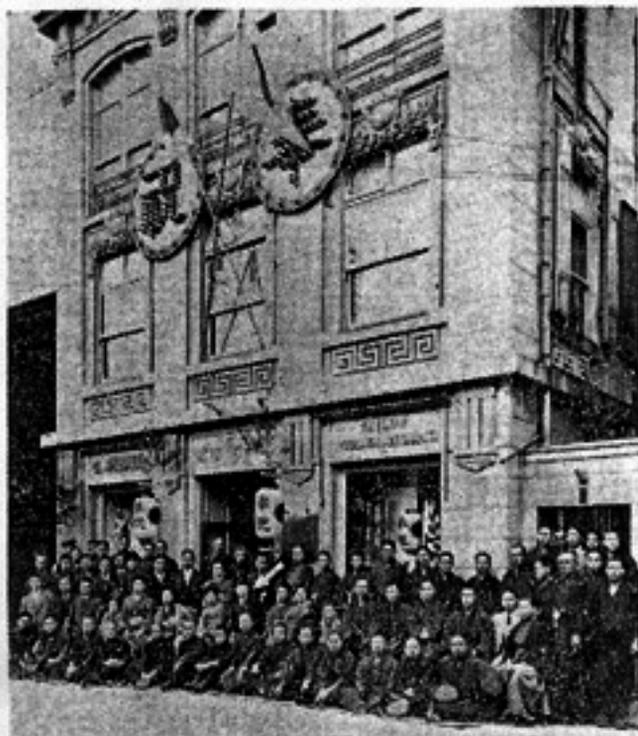
# 遙かなる夙昔

実録・柴田音吉洋服店

⑦

鉄で勝負の職人たち——(金)の伝票で花街通い

新しく元町3丁目に建った三階建、欧風の店は神戸っ子の目を見はらせた。大正天皇即位の日、奉祝の飾りの下で勢揃いした従業員。矢印はフロックコート、シルクハットに身を包んだ初代柴田音吉。



新しい店は、一階が店舗2階が応接間、3階が倉庫の欧風建築。この裏に仕事場の建物がつくられた。

シャンデリアに王朝風のテーブル、椅子。ヨーロッパ調に装いをこらしたこの建物はたちまち神戸っ子の話題をさらった。

◎の洋服を着て、外国亭でピフテキを食べる、といえはそれだけで世間から「紳士」と見られる時代がやってきた神戸に、それまでの「牛鍋屋」ではなく、本格的な西洋料理のレストラン「外国亭」が建ち、人気を得ていったほぼ同じ時期に、柴田の店が本格的な西洋式洋服で名を成していった。どちらにしても、神戸名物には、もはや欠かすことのできないヨーロッパの香りがあった。

これより少し先、日露戦争のため設置された広島大本営に明治天皇が行幸された。神戸を通られたとき、音吉は拝顔の榮に浴している。

天皇の服をはじめ、すでに宮家からの注文はよくあった。

× × ×

明治38年、新築の礎音を聞きながら、音吉の妻くまは、病を得てひっそりと逝った。

終止つつましやかに寄りそってきた妻のなきがらを前に豪快といわれた音吉も、はじめて涙を落した。

「極道して、すまん。せめて新しい店を見せてやりたかった……」。

極道、というほどではなかったが、音吉も花街では結構遊んだ。賑やかで、さっぱりした遊びだったという。

花間での遊客が、オーバーや、上衣を脱ぐと、芸者はそと裏を見る。◎柴田のネームが入っていると、待遇が違った。「上客」なのである。

まして、その柴田のあるじが遊んで、もてないわけはなかった。

「ウチの洋服着てきた客が金を払わなかったら責任をもつ」といった。酔いから出たスタンドプレーというより、心底の深い自信、本音であったに違いない。

洋服は着ないが、下職の職

人たちもまた、◎の名で遊べた。

柴田の仕事場の親方が、職人に仕事の注文伝票を渡す、すると彼らは工賃を受けとる前に、早や福原遊廓へ足を向けた。その伝票で遊べたのである。

飲む、打つ、買うの当時の職人たちは、その伝票でバクチもした。質屋へも行った。◎の伝票は神戸、大阪で、手形、小切手がわりに通用したのだった。

× × ×

1月、2月、そして7月8月は「職人が干物になりそうな季節だった。質屋通いも前借も、なかば生活のリズムになっていたような彼らは、しかし俠気や義理人情を好む「愛すべき」集団でもあった一宿一飯の恩儀は忘れなかった。一本気で、仕事の図抜けてうまい男たちも沢山いた全国をマタにかけた。柴田の店の注文をとることのできた職人は、しかし神戸を離れたがらなかつた。待遇が良くしかも一本立ちの「看板」になったからだ。

それら「通い」の職人たちも、食事は店ですました。夕夕である。閑散期、仕事がなくとも、彼らは店の奥の板場2人を抱えた食堂に、食事だけをとりについた。

住みこみの徒弟たちもまた食い放題であった。食事の質も良かった。音吉の裁量である。

徒弟たちの年期は7年。年期中でも、仕事ができるようになる、小づかい以外に、下職工賃の10%がもらえた。

大正に入るところ、この徒弟たちの小づかいは50銭であった。(つづく)

岡 和子記者